

「インドネシア大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学総合人間学部1年 舟橋 知生

今回わたしは、気候も宗教も大きく異なるインドネシアという国への興味と、この夏に参加させていただいた SEND ハノイ国家大学サマーカレッジプログラムにおいて、外国人との交流に積極的になりきれなかったという反省からリベンジの意味も込めて、インドネシア大学スプリングスクールプログラムに参加させていただきました。いわゆる「社交辞令」的な挨拶や会話にとどまるのではなく、大学生として深い話をしたり、日常的なたわいもない話をしたりすることを目指して、出発前からインドネシア語の勉強をしたり、インドネシア大学の学生と連絡を取り合ったりといった事前準備にも勤めました。その甲斐あってか、研修中は積極的に学生と交流することが出来ました。相手の言語の理解や共通の話題の有無がいかにかコミュニケーションを左右するか、ということを実感しそれらの大切さを再認識しました。研修中はほぼ毎日インドネシア語の語学講座を受講し、日に日に使えるインドネシア語が増えてゆくのはとても快感でした。休日には”Taman mini” というテーマパークに行ってお隣の島独自の文化を学んだり、ジャカルタの“Kota”という地区の博物館巡りをしたりして伝統的な文化や歴史について学ぶことも出来ました。出発前に懸念していた宗教のことについては、予想以上に日常生活に宗教が関わっていて驚きましたが、自分の意思をはっきり持ったり、明確な生活の規範をもったりするという意味において宗教はとても役立っているように感じました。宗教という問題が身近に存在しているからこそそれへの理解も進んでおり、日本人がいかにか無知、無頓着かということを感じ知らされました。現地に行って現地の声を聞くことは誤解を解き、正しい理解を得るのに最も効果的な方法だと実感したと同時に、その際相手の生活文化のどこまでは立ち入り、どこからは立ち入らないでおくべきか、ということを探るのはとても難しいことだと思いました。幸いにも今回交流した学生は、わたしを初めとした日本人は何がわからなくて何が知りたいのか、ということをも自分も知りたい、と言ってくれ、生活、文化、宗教等々のさまざまな考え方について実りのある話ができて、これはとても大きな収穫となりました。また、研修期間中インドネシア大学の学生と京都大学の学生とでチームを組んでプレゼンテーションの作成を行いました。建築・文化財保護、ビジネス、宗教、言葉、ゴミ問題の5つのグループに分かれ、なんどもディスカッションを重ねて細かな意見交換をし、発表に向けて相互の理解をはかりました。発表が日本語ということで京都大学の学生主導となりがちで、インドネシア大学の学生の発表がとても簡単な内容に終始してしまったのは反省すべき点であると思います。簡単な表現を使うにしろ、内容まで簡単になってしまったのはとても残念でした。京都大学の学生側がもっとうまく内容を引き出せなかったのか、どうすれば難しい内容を簡単な言葉で伝えることが出来たのか、ということをよく考えなければなりません。この反省を今後の外国語学習や国際交流のポイントとして活かしていきたいと思っています。2週間のインドネシアでの生活を経て、宗教や歴史に対する興味が深まり、さらに視野が広がったように感じます。この経験を武器に今後も積極的に国際交流に参加してゆきたいと考えております。